

東北赴任雑感

建設部門（東北駐在） 橋尾 宣弘

1. はじめに

東日本大震災が発生してから5ヶ月後の2011年8月に、宮城県仙台市にある東北支社へ赴任した。赴任後は主に海岸エリアの災害復旧に関わることが多かったが、震災復興ならではの業務にも携わることができた。ここでは、震災復興プロジェクトで関係者となっている高台集団移転造成工事CM業務を簡単に紹介する。

2. 宮城県東松島市野蒜北稜地区高台移転造成工事CM業務について

野蒜北稜地区の高台移転造成工事¹では、50～80m程度の定高性を示す堆積軟岩丘陵地をTP+27mまでカットし谷間を埋めて、約560戸、1700人が移り住む住宅街と、運休しているJR仙石線ルート併せて造成する大規模工事である。運土量は約550万m³で、そのうち造成では使わない310万m³はベルトコンベアで海岸側の低地に運搬して仮置きする計画である。

私の担当は、起業者（都市再生機構：UR宮城・福島震災復興支援局）と調査設計受注者 or 施工請負者の間に立って、専門技術を生かしながら発注者に近い中立的立場で建設事業全体をマネジメントするアットリスク型CM²のマネージャ（CMr）である。CMrメンバーは大成・フジタ・佐藤工業（以上が施工担当）・国際開発（設計担当）・エイト日技（測量調査担当）の5社JVで、乙型JVと呼ばれる責任分担型JVである。



¹ http://www.ur-net.go.jp/saigai/info_higashimatsushima.html

² <http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/const/sinko/kikaku/cm/cmguide1.htm>

エイト日技は測量調査業務の管理担当であり、私は地質調査管理の CM r 責任者であるため、造成工事で真っ先に着手する必要のある「谷底堆積軟弱土の地盤改良工事」のための軟弱地盤解析（←国交省歩掛では地質調査業務）の矢面に立たされ、これを倒れてもおかしくないくらいのタイト工程でこなす必要があった。

何が大変かといって、普段の知的なコンサル技術者では味わえない、体育会系のスーパーゼネコン文化でガンガンに作業工程をしぼられ、達成できないと火をふいたように怒鳴られること、に耐えるのが非常に大変であった。ちょうど 1 年前の 2012 年 12 月から 3 ヶ月間、この任侠的恫喝をずっと繰り返し浴びた結果、定例会議はいつしかわが社の担当間では「憂鬱会議」と呼ばれるようになった。

国から補助を受けているのは東松島市、そこから委託契約を受けているのが UR、その建設事業全体をマネジメントしているのが CM r、なのだが、実際のところ CM r にはほとんど権限というか決定権はないのが実態である。つまり UR の事務所、復興局と、東松島市の建設、農林、教育（学校もできる）、上下水と、宮城県の出先事務所、県庁と、さらに同時造成の JR の各関係先、、、ざっと、思いつくだけでもこれらと意見調整→意思決定しながら大型ブルが走り回る！という「考えながら走る事業」なのである。CM r の統括管理技術者（スーパーゼネコン部長：技術士）と副統括（国際開発ベテラン次長：でも RCCM のみ）、の相当広い視野と先を見通す神通力なしでは到底前進は難しく、その分野の経験豊富なベテランがモノをいう世界だと感じる。

このほか、ここではとてもお話しできない事件や発言やエピソードが満載で、非常に良い経験にはなったが、はたして誰にでもお勧めできる職種かどうかは、なんとも言い難いと今も感じている。

3. おわりに

島根を離れてちょうど 2 年と 1 ヶ月が経過した 9 月中旬、技術士会の代表視察団をお迎えした。井上青年部会長から視察プランの連絡をいただいたとき、技術士会在籍のまま震災被災地へ赴任したのにもかかわらず、被災地事情を説明できる十分な情報を持ち合わせていない自分に気づき、冷や汗をかいたことを思い出す。

そんな私が、かろうじて代表団のみなさまに気づかれることなく現地案内できたのは、たまたま代表的な被災地を業務や個人で訪れていた、ということが大きかったと思う。つまり「被災地の生の状況を自分の目でみている」ということである。目で見て五感で感じるのが、技術的解決の第一歩であることを、再認識した次第である。

参加者の皆さま、大変お疲れ様でした。そして、今回参加できなかった会員の皆様にもぜひ、どの段階でもよいので被災地を訪れていただければと思います。

以 上